

緘黙症Y子（17歳）のプレイセラピー

— 転移性恋愛について —

神野 秀雄*

はじめに

筆者は、かつて緘黙女児のプレイの経過（幼稚園年長組より小学2年の2学期までの約2年間）を報告したが（神野 1985）、そこでは、I期：硬直期→II期：活動期→III期：攻撃期→IV期：甘え期→V期：退行期→VI期：甘え、攻撃を中心とした多様な生々しい感情の表出期、開口期とプレイの経過は推移していった。セラピストの在り方としては、I期の硬直期に最も困惑したが、しかし一旦 rapport（治療的人間関係）が形成されると不思議なくらいクライアントは内面を manifest し、変化・成長していった。率直に言ってプレイの面白さ、治療的人間関係の重要性、人間の不思議さ（自己実現への衝動）を実感した貴重な体験であった。

筆者は、これまで思春期・青年期の緘黙症とのガイダンス的な相談の経験はあったが、継続的な心理療法の経験はほとんど無かった。これから報告する事例は、筆者が初めて継続的に心理療法を実施し、数年前に一応終結した緘黙症（17歳女性）の1年4ヵ月にわたるプレイセラピーの経過である。本事例は治療経過の中で、所謂転移性恋愛を明白に示し、その対応に苦慮したセラピストであるが、以下プレイセラピーの経過の概要を述べ、転移性恋愛を中心に検討していきたいと思う。

Y子の生活史の概要

緘黙症Y子は、中学（特殊学級在籍）を卒業後、近くの饅頭屋で働き始める。しかし主人から指示された仕事はするが自発的に動くことが全くできず、三ヵ月でクビになってしまった。その後母親の実の姉のところでは働きはじめたが、Y子が口をきかないことや姉の身体の調子が悪くなったこともあって結局家庭に引き取ることになった。この半年あまりY子は自宅で母親の内職を手伝いながらすごしているとのことであった。

Y子は三人姉妹の真ん中で、姉（高校生）と妹（小学生）、両親、父方の祖母の六人家族である。Y子は、早産（八ヵ月）未熟児（2000グラム）で生まれた。乳幼児期はとても身体が弱く病院通いが多かった。保育園には2年間通い、友達とも遊んでいた。小学校時代は普通学級でどうにかやってきた。中学は特殊学級に在籍した。教室に卓球台がありピンポンをよくやっていたようだ。友達が三人いたようで、仲間同士では会話ができ、自宅の電話では、自由にお喋りしていたとのことである。中学を卒業してから「多少よくなってきたかなー」と母親は言う。電話がかかってくると、ちゃんと対応ができ、よく喋るので「Y子ちゃんじゃないと思った」と言われたことがあるそうだ。

*愛知教育大学障害児治療教育センター長

本センターにY子が母親と伴に来所したのは、中学卒業後丁度一年たった4月であった。1回目のインテイクでは、上述したような生育歴の概要を筆者が母親から伺った。その後Y子は卓球が得意であることを知ったこともあって筆者はY子と一緒にプレイルームに入り、卓球を10分程して終了した。以下30回にわたるプレイセラピーの経過（インテイクを第1回としたので第2回目より第31回目まで）を述べていきたいと思う。担当Th（セラピスト）は筆者である。

プレイセラピーの経過

2 4月24日

母子で来所。母親が「このあいだのどこ行くよ」とY子に言うにつれてきたそうだ。本センターに来るまで約2時間かかるとのこと。母親には待ってもらい、早速プレイを開始する。

今回はThの大事なラケットをCIに渡し、Thはプレイルームにそなえつけてある貧弱なラケットで卓球をする。今日は2回目ということもあって、本格的な卓球という感じになる。CIの球はバウンドしてから勢いがよく、Thは一生懸命にやる。30分ほど続け、少し休憩をとった。卓球台の近くの長椅子に少し距離をおいて腰掛けた。Thは「うまいなー」とか「卓球の選手だった」など語りかけるが、CIは恥じらいを含んで笑顔を示すのみで喋ることは無かった。CIは少し疲れたようで休憩後は軽く卓球をして終了した。帰り際玄関で母親に促され、蚊の鳴くような小声で「さようなら」と言って帰る。

CI自身どんな気持で来所し、何を感じて帰っていったのであろうか。

3 5月6日

前回のように卓球に誘い30分ほど続けた。CIは足を動かすことをせず卓球をするので、ThはCIのリーチの範囲内に返球しなければ続かない。休憩後はバドミントンをする。ミニ体育館のようなプレイルームであるが、シャトルを打つと天井に当たってしまうことが多く、あまり楽しめないが、それでも10分位はやり続けた。CIの表情は比較的和らいできており、ときには笑顔を見せることもあった。

今日も母子で来所したが、母親よりY子一人で来させてよいかという話があり、「結構です」とThは返事をしておいた。

4 5月23日

今回初めて一人で来所した。半袖の白いブラウスとキュロットスカートをはき、ナップサックを持っていた。プレイの内容はパターン化してきており、30分ほど卓球をして、バドミントンをして最後に少し卓球をして終わる形式になってきている。卓球をしている時最もCIの感情表出が見られる。ネットぎわの球をThが返そうとして、ついラケットを放り投げてしまった時などCIは声は出さないが愉快そうな表情をしたり、とても長くラリーが続いたりすると満足そうな顔になったりして、自然な感情の表出がかなり見られてきた。Thとして最も困惑する時は休憩の時間である。とても気詰まりな雰囲気になってしまう。今日はCIから離れ、Thはブランコの修理をした。その

途中フツとClを見たら、Clはバドミントンのラケットを持ちながら色々な玩具に触れており、とてもリラックスした動きをしており、Thと対面して卓球をしている時とは全く異なる伸び伸びした姿に驚いてしまった。

5 6月9日

5分遅れて来所する。今日のClは金色のマニキュアをし薄化粧をしておしゃれな服装をしている。Thは腰痛で体調はよくないが、いつものように卓球をした。今日のClは、積極的に左右に打ち分けてくる。特にThの弱点であるバックを狙ってくる。はっきりと意図的にバックを攻めてきたり、所謂さるまわしのように左右に打ってきたりする。従ってThはよく負けてしまうが、そんな時は嬉しそうな笑顔を見せる。

6 6月23日

6月21日にClの自宅に電話した。27日の予定をThの都合で23日の11時に変更するためである。リンリンと電話の音が長く続き留守かと思った。しかし受話器がとられた。Clの声で「もしもし」とはっきりした声が出た。「愛教大の神野です」と言うと、Clは驚いた様子で急に黙ってしまう。Thは日時の変更を伝えた。Clは小声で「うん」というような感じの声が出た。

23日は11時になっても来所しない。11時30分頃自宅に電話をする。母親がおり、いつものように朝8時に家を出ており、10時30分には大学に着いているはずだと言う。Clは今日に変更したことも母親に話しておりThは安心したが、しかし、どうして姿を見せないのであろうか。

お昼のテレビのニュースを見ていると、9時すぎに豊明付近で名鉄電車の事故があり上下線とも不通というニュースがながれた。来所できない理由がやっと分かり、今日はもう来ないと思った。ところが12時30分ごろClは姿を現した。Thが「名鉄が動かなかったの」など聞くと、Clはうなづくわけでもなく、ただただきまるわるそうな表情をするだけであった。30分ほど卓球をする。ThはClの打ちやすいところに一定して返球するが、ClはThのフォアに打ち続け、突然にバックを攻めてくるのが度々あった。今日のClもオシャレして来所した。

7 6月30日

Clは玄関のソファでうつむき加減で待っていた。今日も卓球するが、Thの方は少々飽きてきた感じもする。しかしClはいつものようにThのバックを攻めたりして困らせる。休憩後バレーボールに誘うがClの動きは鈍く続かないので止めてしまった。簡単にできるスカイピンポンを15分ほどして終了した。次回はThの都合で7月19日はどうかと日付を書いたメモ用紙を渡すとClは困った表情をする。「都合悪い」と聞くとClは小さくうなづく。7月25日に変更したメモ用紙をわたすと、うなづきもしないが、ノーというサインを示さないので多分良いようであり、帰っていった。

8 7月25日

10分遅れて来所した。今日はとても暑く卓球は20分ほどで止める。休憩後はスカイピンポンや

Thの提案でもぐら叩きゲームをした。Clは規定の時間のあいだでいつも2～3匹しかもぐらを叩けないが、5～6回Thと交代しながらやった。

9 9月12日

母子で来所。母親としては、長い間大学に通うとThに迷惑がかかると思っておられるようで、これからも継続してよいかどうか確認にこられたようだ。母親によれば、家の中では、ちゃんと喋れるようになってきて、時々大きな声を出すとのこと。この表現からすれば、家庭でもこれまでは寡黙傾向であったのであろう。習い事としては、着付け教室とお花の教室に通っている。買い物もとても好きとのこと。

約30分卓球、5分休憩、20分位バドミントンをする。卓球ではわざとネットに近いところに球を落したり、Thをさるまわしにするので、Thが「意地悪だねー」と言うとニコーと笑い、とても自然な表出であった。休憩の時「卓球の他に何かしたい？」と尋ねてもClは下を向いたままである。

10 9月22日

2階の研究室で電話をしているとClの歩く姿が見えた。5分程して玄関のソファのところに行くとClはいない。数名の学生がたむろしておりClはおりずらかったのであろう。Clはプレイルームへ行く途中の所に立っていた。

Thは汗かきで20分も卓球をすれば、シャツは汗でズクズクになる。しかしClはほとんど汗をかかない。太りぎみのClであり不思議だねーといつも思う。今日も前回のように意地悪な面をのぞかせた卓球であった。また笑顔もよく見せたセッションであった。

11 10月3日

10分遅れて来所する。今日のClはとてもオシャレしてくる。いつもはスニーカーだが、ハイヒールを履き、マニキュアをし、化粧をして服装もアダルトな雰囲気である。とても卓球などする恰好ではないが、いつも通りのプレイの内容であった。今日のClは少し表情も固く、プレイもパターン化してきており、どうしたらよいのかThはつくづく考えこんでしまった。

12 10月15日

玄関には、学生や掃除のおばさん達がいてClにとっては居場所がないようで、プレイルームへ行く途中に今日もいた。卓球では、ショートで非常に早い球を打ってくる。今までにない激しい感じで、aggressiveなものが球にこめられている感じさえもするほどである。しかし表情はゆるやかな雰囲気であった。

13 11月13日

10月30日が予定のプレイであったが、Thの都合が悪くなり、10月18日にCl宅に電話をした、Cl

自身がでて「はい、もしもし」とはっきりした声がきこえる。大学の神野と言うと急に黙ってしまうが次回は11月13日にすることを2回言い、「よろしいですか」とThが言うと、Clは小声で「はい」と明確に返事をしてくれた。

今日のプレイの開始時間は11時であるが、10時50分頃講義を終えて研究室に戻るために廊下を歩いていると2階に上がってきたClの姿を見かけた。しかしThの姿を見た途端、驚いたようにして下におりていった。何故Clは2階にあがってきたのであろうか。

いつものプレイルームに行くときすでにダウン症の子がプレイをしていた。卓球を始めると、ブラレールで遊んでいたダウン症の子がThに近づいてきて、卓球をしたいと言うのでThは困ってしまう。断わっても何度もしつこく迫ってくるので結局交代した。Clはそのダウン症の子を相手に5分程ピンポンをしてくれた。まもなくその子は時間がきて帰っていったので再び卓球を始めた。さるまわし的にThをよく動かしたClであった。

#14 11月20日

11時に降りていったところClの姿がみえない。今日はボイラー工事のため数名の関係者が来ている。いろいろな所を探すが見つからないが、結局面接室の中で待っていたのを見つけた。今日のClは一段とオシャレしてきた印象である。プレイの内容はいつものパターンである。

#15 12月11日

Clは面接室の中で絵本を見て待っていた。プレイルームに入ると、ダウン症の子がClに親しげに近づいてきた。Clは少々嬉しそうなお表情を示しながらも困ったようで、Thに視線を向け助けを求めている感じであった。しかし、すぐダウン症の子は帰っていったので卓球を始めた。休憩中Clは自発的にパチンコを始め、10分ぐらい熱中してやっていた。

#16 12月18日

今日も面接室で待っていた。Clはとても卓球はうまくなり、球にスピードと威力がでてきた。休憩時間になるとうろうろしながらもパチンコに近づき、やり始めた。

#17 1月8日

Clが来所する日であることをThは全く忘れていた。Thは9時30分頃に大学に来て研究室にいた。Clはいつものように10時半に来ていたようだ。12時半頃に母親よりThに電話がはいった。Clが大学構内より母親に電話したようだ。まもなくClが姿を現した。20分ほど卓球をして終えた。Thの失敗の巻きであったが、Clもどうして2階の研究室をノックしてくれなかったのかと、いくらか腹立たしい気持ちにもなった。

#18 1月21日

Clの待っている所に行くと、Clはソファに腰掛けていた。そのソファの後には黒板があるが、

そこには「神野先生のうそつき」と書かれてあった。Th はまさか Cl が書いたとは思わなかったし、一体誰が書いたのか不思議に思い、「これ誰がかいたのかなー、Y子さん？」とついうっかり尋ねてしまった。しかし Cl は全く無反応であった。

いつものプレイルームは人がおり、風の無い晴天ということもあって、外でバドミントンをした。Cl の表情も柔らかく楽しい時間であったが Th は黒板に書かれてあったことがずーと気になっていた。

#19 2月5日

講義を10時30分に終えて40分頃研究室を出ていくと、階段のところで Cl と出会う。プレイの開始の時間が遅れたので様子を見にきたかもしれないが、時々予期せぬ行動をとる Cl である。一緒にプレイルームに入ったところ、入口にあるホワイトボードに「神野うそつきである Yes」と書いてあった。Th は黙ってボードの前を通り過ぎたが、内心はひどく動揺してしまった。明らかにこれを書いたのは Cl であり、動かない Th に揺さぶりをかけてきたのであろう。卓球を開始したが、気のせいかもしれないより激しく打ってくる Cl であった。

#20 2月19日

春休みになり Th は講義はないが、9時過ぎには大学に着いた。10時10分頃 Cl のやって来る姿が見えた。Th は「今日はどうしよう」と思い悩んだが、どうしようもなくプレイにのぞんだ。10時20分ごろ降りていくと、Cl はプレイルームの方に向かっていたらしく丁度戻って来たところであった。Th は「また何かメッセージでも書いたのではないか」と疑ってしまったが、今日は何も書かれてなかった。Th はただひたすら卓球をした感じであった。今日はダウン症の子とかなりの時間一緒であった。Th よりも Cl に近づいていくことが多く、そういう時 Cl はいつも照れ臭そうに笑っている。緊張ぎみの雰囲気ダウン症の子が和らげてくれた感じがして Th にとって助けられた思いであった。

#21 3月5日

丁度10時30分に降りていくと Cl はソファにちょこんと腰掛けている。ソファの横にある黒板には赤のチョークで、傘マークの下に「Y子・神野」と書かれてあることに Th はすぐ気づいた。Cl は手に何かを持っており、それを Th に差し出す。どうも菓子箱のようであるが、Cl は何も言わない。「持ってきてくれた」と Th が言うと、Cl はニコと笑う。Th はそれを受け取り事務室に置きに行った。戻ってくると黒板に書いてあったメッセージはすでに消してあった。Cl は明確なサインを送ってきており、はっきりとした陽性転移が示されたが、Th は一体どうすればよいのか。今日もひたすら卓球をする。ロングの応酬で Th が Cl のリーチの範囲内に返せば30回も40回もラリーがつづいた。

#22 3月19日

いつもの約束の時間に降りていく。Clは待っていたが、黒板には赤のチョークで何か書いた形跡が残っていた。その時は、ThはClと一緒にプレイルームに入る。そしていつものように卓球をした。Clが帰った後、気になったので黒板を見ると「としごろの女の子…神野……行きませんか…はだれ…」と読み、どうもデイトの誘いのメッセージであった。Thはフロイトの転移にかんする論文を読もうと研究室にあるフロイト全集の一冊をカバンに入れ帰った。

#23 4月9日

いつもならば10時10分頃来所するが、来ている気配がない。30分になっても来ない。Thは転移のことがひどく気になっており、中斷かなーと心配になってきた。10時35分にClは春らしい白っぽい服装でやってきた。卓球を20分ほど続けたがThは転移のことばかり気になり、追い詰められた感じもあり、動きが非常にぎこちない。Clの方も表情が乏しく、緊張ぎみであった。10分ほどの休憩の間Clはオモチャをなぶったりして結構自由に動いている。ThはClから離れ一人でボールを壁にぶつけていた。そのうちClがThの方にやってくるので、Thの持っているボールをClに投げると受け取ってくれた。そこでClは可愛い笑顔を見せた。Thは気になっていたものが吹っ切れた感じがしてとても楽になり、ズーとキャッチボールをし時間をすごした。

#24 4月24日

10時10分頃にClがやって来る姿が見えた。真珠のネックレスをして今までのなかで最もおめかしして来所した。Thは転移の処理の仕方も分からず、いつものパターンを繰り返すのみである。

#25 5月1日

今日は10分遅れで来所する。カラフルな可愛い傘をさして、今日の服装もなかなかのものである。卓球をしながら時々視線が会う。Clが打ち損なったりするとThの顔を見てニヤーと笑うことが度々あった。とても柔らかな雰囲気Clである。

#26 5月8日

卓球では最初ロングの応酬であったが、途中からClはカットに切り換えてきた。ボールの切れがよくThは一生懸命ドライブをかけるが、ネットに引っかけることが多く、Thの方が分が悪かった。その後はキャッチボールをしたが、Clの表情は楽しそうであった。

#27 5月22日

予定の時間より40分遅れて来所する。Thはかなり怒れてしまったがClの顔をみると何も言えなくなってしまう。卓球でClは左右に少し動けるようになり、Thの打つ球が多少ズレても打ち返してくる。何十回とラリーが続き、本当に速い球を打ち返してくるようになり、時にはThが打ち遅れてしまうこともあった。時々笑いがとても自然に表出されるようになってきた。その後はバト

ミントンやキャッチボールをした。

#28 5月29日

予定の時間よりも10分早く来所した。

#29 6月5日

10時すぎには来所していたようで、10時20分頃に降りていくとCIはプレイルームから戻ってくるところであった。そこで顔を会わずとCIは微笑みを見せる。今日も卓球ではかなり激しく打ち合う感じであった。

#30 6月26日

10時20分頃降りていくとCIの姿が見えない。まだ来ていないと思ったが、温水プールの方に人の気配がする。そーと覗いて見るとCIは棚に沢山置いてあるオモチャをいじっていた。Thの気づかないところで色々動いているCIだなーとつくづく思った。30分ほど卓球をした後CIはプレイルームの玩具を触っている。そのうち人指し指に擦り傷を作ってしまう。Thが「バンドエイド貼ろうか」と言うとCIはニコリする。事務室からバンドエイドを持ってきてThはCIの指にまきつけた。

#31 7月22日

7月6日に母親より電話が入った。CIは7月6日より毎日洋裁学校に通うことになったとのこと。今までは個人のやっている洋裁教室に通っていたが、そこの先生の勧めで通う気になったようで4年間通うと何か資格が得られるそうだ。母親によるとCIは大学にも行きたいが、洋裁学校にも行きたいようで困っているとのことであった。

本日（7月22日）が最終会となった。今日は洋裁学校を休んで来てくれたようだ。暑い中卓球をする。卓球台の対角線でラリーが続く。CIは意地悪くThのバックを突然に攻めてくる。Thの打った球を後ろにそらし拾いにいくが無い。Thも探しにいくがどうも見つからない。そのうちにCIは左手をパッと広げる。なんとCIはThをだましていたのである。掌を開けてThに笑いかけた姿がとても印象的であった。休憩の時に「今日で終わりにしょうか?」と尋ねると、CIはほんの僅かうなずいたように思われた。

考 察

(1) 31回にわたるプレイセラピィの経過を大まかに区分すれば次のようになるであろう。

I期（#1～#3） 母子で来所。卓球が始まる。

II期（#4～#8） 時々、薄化粧をしてくるようになり、服装が派手になってきた。卓球をしている時には自然な感情の表出がいくぶん見られるようになってきた。

III期（#9～#16） 一層オシャレな服装になってきた。Thを意図的にさるまわしのよう

かしたりして意地悪な側面をよく見せるようになる。

Ⅳ期（#17～#22） 度々黒板にThへの愛のメッセージを書く。Thは困惑する。

Ⅴ期（#23～#31） 最高のオシャレをして来所する。時々示す感情はとても自然に表出されるようになる。洋裁学校に毎日通学することになり終結となる。

このようにしてみると、CIは一人で来所するようになったⅡ期頃よりすでにThへの陽性感情を示し始めている。Ⅲ期では、いくらか mild な negative な感情を表出しながらも転移性恋愛感情を強く表してきた。Ⅳ期では明白な愛のメッセージをThに示した。そしてⅤ期のCIは柔らかな楽な雰囲気によくぶん変化し、自然な感情表出が多く出されるようになっていった。31回のプレイの経過は、いわば「愛の告白」のプロセスとってよいかもかもしれない。

一方Thの動きはどうであったであろうか。セラピスト・筆者が自分自身のことを語るにはいくらか抵抗があるが、本事例の心理治療を終え数年経った現在の時点でこのように振り返ってみると、CIの途な態度・在り方からだと思われるが、ただただひたすら真剣に純粋にCIにかかわっていたな—という思いがつのってくるのである。同時に思春期の女の子の誘い・じらし・揺さぶりにアタフタし、様々な感情に揺り動かされたセラピスト（逆転移）も明白に存在していたようだ。もしかすると当惑し、困惑しているセラピストをどこかでCIは楽しんでいたかもしれない。

（2）本治療過程での中心的問題は、CIが示した恋愛感情に対してThがどのように対応することが適切なのかという点であろう。セラピストは第22回のセッション終了後、フロイトの「転移性恋愛について」という論文を読んだ。以下やや長くなるが主要と思われる部分を抜粋してみよう。

- ① 精神分析において唯一の真に重大な困難は、転移の取扱について起こるものである。私がいうのは、ある婦人患者が、あたかも恋に陥って死ぬほどに恋い焦がれている女性のように分析医を好きになってしまったことをはっきりした表現を用いてほめかしたり、それを直接口に出して言ったりする場合のことである。
- ② 愛情問題の帰結するところは二つしかないと考えられる。一つは合法的に二人が結びつくことを許す場合である。他の一つは患者と医者が物別れになり、治療を中止してしまうことである。考えられるもう一つは一時的に恋愛関係を結ぶことである。しかしこの場合医師の品位にもかかわることであるから、実際的には不可能とされよう。しかし精神分析の立場はこれらとは違った立場でなければならない。
- ③ 婦人患者の恋愛は、分析状況を通して法則的に引き起こされるものであって、分析医の個人的な人格が優秀であるからというわけでは決していない。従って分析医は自慢する理由は全然ない。
- ④ 何よりも我々は、治療の継続を阻止しようとするものは、全て一つの抵抗の表現なのではないかという疑いを抱くようになる。激烈な愛情要求は、決まって必ず、我々が彼女にその生活歴の中で特に苦しい、辛じて抑圧している部分を告白するか、あるいは想起することを要求した時点において出現する。そして分析医を苦しい窮地に追い込もうとしているのである。
- ⑤ 分析医はこのような状況に直面しながらも挫折してしまわないために、どんな態度をとらなけ

ればならないのか。恋愛している女性を前にして道徳的欲求と断念の必然性をさとし彼女がその欲望をすてて、彼女の自我の動物的部分を克服することによって治療を継続させること。しかしこのような分析医の態度は分析的ということではできないし、無意味な処置をしたにすぎない。そんなことをすれば婦人患者は侮蔑を感じて必ず復讐してくる。

⑥ 分析治療は禁欲のうちに遂行されねばならない。婦人患者の愛情願望を承認することはそれを抑制することと同様、分析治療にとって危険である。我々は、恋愛転移を回避したり、それを追いつけたり、または患者にそれが嫌だという気持ちを起こさせないようにしなければならない。またそれに応ずることも断固として控えなければならない。恋愛転移を非現実的なものとして治療の範囲内で解決し、最も深く隠蔽されたものを意識の支配下におかれることを助けなければならない状況として取り扱う。

⑦ 恋愛は現在の状況から発生しているわけではなく、あくまでも過去の、そしてまた幼児期の反応の反復や模倣を寄せ集め、組み立てたものにすぎない。幼児期の原型を反復しないような恋愛は存在しない。

筆者はフロイトのこの論文はかなり以前に読んだことがあったが、本事例の対応に苦慮していたころ、その論文を思い出し熟読したのである。転移性恋愛についての処理に関して特に重要な点は、上述した⑥であろう。土居（1991）の分かりやすい説明を措ければ「転移を避けてはいけなく、追っ払ってもいけないし、それを台無しにするようなこともしないように注意せねばいけない。またそれに分析者が答えようとしてはいけない。答えないでしかもそれをエトバス・ウンレアールス（etwas Unreales）何か少し非現実的なものとして扱うのだ。」と述べている。ともかくフロイトは、答えてもいけないし、拒否してもいけない、少し非現実的な第3の道を取りなさいと述べているが、筆者にとっては当時も今も十分に理解できないのが偽らざるところであり、当時においては、フロイトの論文を読めば読むほど第3の道を捜し出すことは困難であったことを記憶している。セラピストは Yes とも No とも言わず、ただひたすら卓球をし続けたのであった。結果的には、これでよかったのかもしれないが。

（3）緘黙症の治療方法に関して相馬（1991）は、最近10年間の個別事例研究を review して「選択性緘黙症の基本的問題を、言葉の問題よりは、脆弱な自我を護る防衛反応や対人関係の障害と捉えて、緊張や不安感を解消し、安全で保護された空間を保障し、自発的な表現を促すことによって緘黙症の解消から人格の変容を目指すアプローチがその大方の考え方である。」と述べているが、筆者も基本的には同感であり、緘黙は、一種の防衛様式と考えることが妥当であろう。はじめに述べたように筆者の経験では緘黙症において、話しことばが出現するまでには、甘え、攻撃を中心とした多様な感情をセラピストに向け表出し、それをセラピストが受容するという体験をはたしなく繰り返さなければならないことを実感した。緘黙の背景には、いわば蓄積され抑圧された感情のエネルギーが想定されるのであり、それが他者によって受けとめられる必要がある。このことが治療的体験として意味を持つのである。

本事例の場合、インテイクの時から Th と卓球をすることができた。ピンポン球が二人の間を行

き交い、Th も Cl も色々な思いを込めて球を打ち合い続けるのである。卓球は沈黙の中での立派なコミュニケーションと言えるであろう。このようなピンポン球のやり取りは心のやり取りではあるが、ことばを介さない故に Th も Cl も fantasy がどんどん膨らんでゆき、その fantastic な思いは現実性がどんどん薄められていくのであろう。逆に Th も Cl も自分自身の心の中にある何か（おそらく意識されていない重要な何か）が沸き起こってきて、それを相手に勝手に投影することになる。これが、本事例の転移性恋愛なのであろう。本事例は小学校低学年あるいは中学年の頃より明確に学校場面では緘黙症状を示し、それが長期に渡って続いた。現実の学校場面では生々しい対人接触が回避され続けられたが精神世界はかなり活発に機能していたように推測される。Cl はたまたま筆者と出会い、プレイルームという安全を保護されたやや非現実的場面で Cl にとって最も重要な恋愛感情を Th に向けてきたのであろう。このことは思春期の Cl にとって初めての real な生々しい体験であり、このことがなによりも治療的に意味のあることであろう。

しかしながらこの恋愛感情が何故生じてきたのであろうか。フロイト的に考えれば、抵抗となるが、それでは何を意識化させることへの抵抗なのであろうか、何が転移しているのか、また緘黙症状とはどのような関連があるのか、といった諸問題は筆者にはよく分からない。筆者は、分析的アプローチの立場ではないが興味ある諸問題のように思われ、今後の課題としたい。

引用文献

- 土居健郎 1991 専門性と人間性 心理臨床学研究 第9巻 第2号
フロイト, J. 1915 転移性恋愛について (フロイト著作集9 小此木啓吾訳 1983 人文書院)
神野秀雄 1985 著しい甘えと攻撃性を示し、子犬に退行したある緘黙女兒の play therapy 治療教育学研究 (愛知教育大学障害児治療教育センター) 第6輯
相馬嘉明 1991 選択性緘黙の理解と指導——わが国の最近10年間の個別事例研究を中心に—— 特殊教育学研究 第29巻 第1号